

社会技術研究開発事業  
令和6年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム  
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」  
「 サービス・モビリティと多形態コミュニティの繋がり  
による社会的孤立・孤独予防モデル 」

米澤 拓郎  
名古屋大学 大学院工学研究科 准教授

## 目次

1. 研究開発プロジェクト名 .....	2
2. 研究開発実施の具体的内容 .....	2
2-1. 研究開発目標 .....	2
2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン .....	2
2-3. ロジックモデル .....	3
2-4. 実施内容・結果 .....	3
2-5. 会議等の活動 .....	17
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況 .....	21
4. 研究開発実施体制 .....	23
5. 研究開発実施者 .....	26
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など .....	27
6-1. シンポジウム等 .....	27
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など .....	27
6-3. 論文発表 .....	28
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） .....	28
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等 .....	30
6-6. 知財出願 .....	32

## 1. 研究開発プロジェクト名

サービス・モビリティと多形態コミュニティの繋がりによる社会的孤立・孤独予防モデル

## 2. 研究開発実施の具体的内容

### 2-1. 研究開発目標

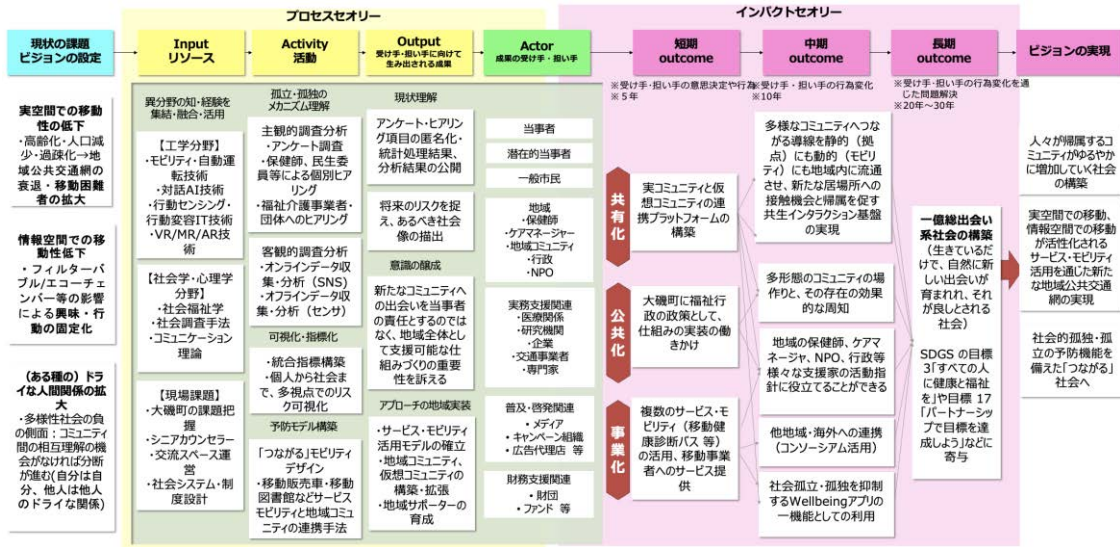
本研究開発プロジェクトでは、研究者と当事者が共に研究チームのメンバーとなり、興味・思考・行動と孤立・孤独のメカニズム（指標づくりを含む）を定量的手法を駆使しながら共に行う。指標は、医療職、福祉職、行政専門職など誰が見ても納得できるものであることが目指され、会った人の数、外出時間・回数、数や時間といった一律の標準的指標だけでは測れない、内的な孤独の自覚を表現できるようなものとなることを目標とする。さらに、地域内で自然に他のコミュニティへの接触が増える仕掛けとして、つながりを育むオンライン・オフラインコミュニティの接続技術、およびサービス・モビリティを活用した「近づいてくる」コミュニティへの導線づくりからなる孤独・孤立予防モデルを実現する。具体的な目標として、2つ以上のメタバース空間をオンラインコミュニティとして、1つ以上のオフラインコミュニティを運用するとともに、2つ以上のサービス・モビリティを通じた地域内のコミュニティ導線を実現する。実験参加者のうち、計50人以上へのアンケート調査を行い、提案基盤が孤独・孤立予防に役立つかどうかの評価を行い、その有用性を示すことを目的とする。また、各コミュニティにおける滞在回数、滞在時間などの定量的なデータも含め、学術的な評価手法に基づきその評価を行う。

### 2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

Q1.興味・行動の幅と社会的孤独・孤立の尺度との関係性

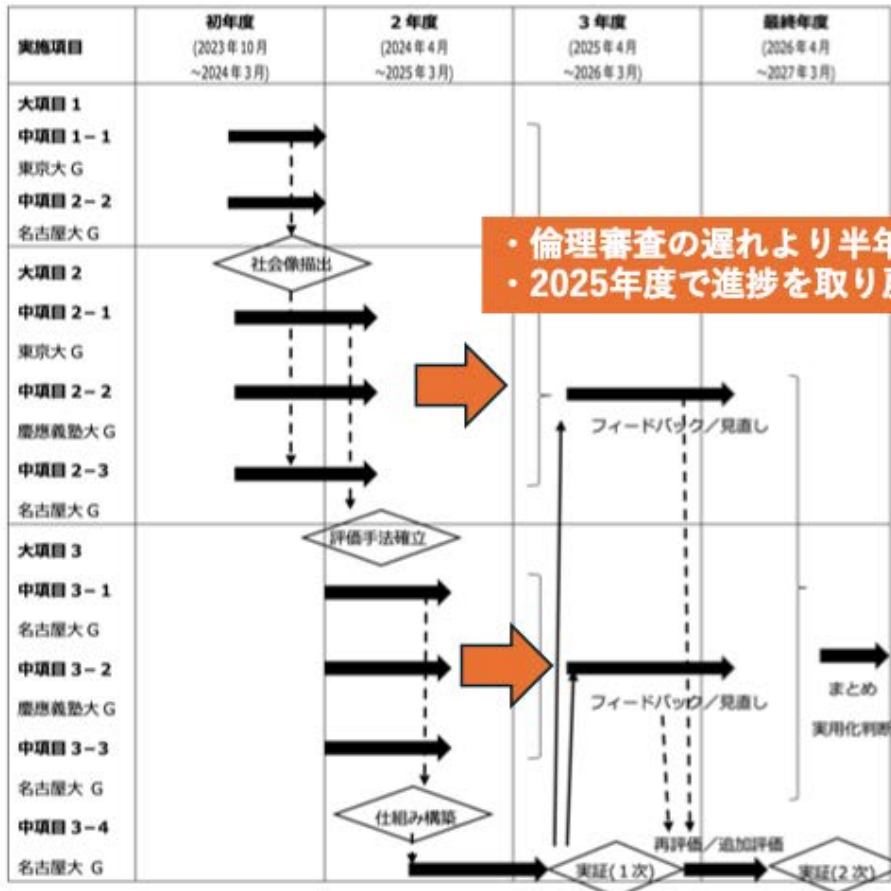
Q2.サービス・モビリティが人々をゆるやかにつながるメディアとなりえるか

### 2-3. ロジックモデル



### 2-4. 実施内容・結果

#### (1) スケジュール



## (2) 各実施内容

### 当該年度の到達点①

本研究プロジェクトの社会的孤立・孤独のメカニズムの独自の視点を踏まえつつ、行政や住民と対話を行い、社会的孤立・孤独を予防可能な新たな社会像を描出する。まず実施項目①-1において、大磯町のみに限らない国内外他地域においても適用可能な孤立・孤独のメカニズム理解の枠組みを達成する。さらに、そのメカニズムに基づき、孤立・孤独の予防に資するサービス・モビリティの活用を独自コンセプトとした、民・官利活用モデルのプロトタイプをまとめる。

#### 実施項目①-1メカニズム理解

##### 実施内容

大磯町に関する行政の既存資料やアンケート等を基にした文献調査、2023年度から実施している大磯町の医療福祉の関係者、民生委員・児童委員やNPOなどの市民活動に取り組んでこられた方々、行政福祉職員等へのヒアリング調査、2024年に実施する全戸アンケートを基に、大磯町における孤独・孤立に関する実態と課題について同定し、研究班で情報共有をして、孤立・孤独のメカニズムについての考察を深める。その際に、こうした孤立・孤独の状況把握とメカニズム理解がいかに行われているのかについて、国内外他地域における実践に関する文献調査や視察調査を基にして把握し、汎用性ある理解の枠組みを検討する。

期間令和6年4月～令和7年3月31日

実施者細田 満和子（東京大学・特任研究員 / 星槎大学・教授）

対象文献調査、行政資料、聴き取りは行政、市民活動実施者、東光院関係者など

#### 実施項目①-2社会像の描出

##### 実施内容

昨年度実施に引き続き、実施項目①-1のメカニズム理解に基づき、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出を行う。大磯町におけるあるべき社会像を出発点としつつも、日本全体における社会背景と将来予測、情報とモビリティの技術背景と将来予測を整理し、孤立・孤独の予防機能を内在する社会像を明確化する。昨年度会場手配の関係で実施が延期された大磯町の行政・住民が参加するワークショップを主催し、これらの調査・議論結果を伝えるとともに、町民とともにあるべき大磯町の社会像の議論を行い、その結果をオンラインで公開する。なお、本研究が想定する社会像を実現する過程で対象とするユーザ層や実証実験の対象コミュニティなどは、全世代とするか対象を絞るかによって効果面やコスト面でのリスクが存在する。本ワークショップでは大磯町の現状および将来の課題を住民の方と議論し、本研究の対象とするユーザ層についても改めて見直す契機とする。

期間令和6年4月～令和7年3月31日

実施者米澤 拓郎（名古屋大学・准教授）  
対象文献調査、専門家、大磯町

## 当該年度の到達点②

大磯町における社会的孤独・孤立に陥るリスクを理解するため、主観的データおよび客観的データの収集方法を詳細化し、実施体制を整えるとともに、その実施を行う。これにより、社会的孤独・孤立に関する大磯町の特性を明らかにするとともに、他地域にも展開可能なデータ分析、モデル化を行う。さらに、主観的・客観的に得られたデータの統合分析手法および指標化の手法を構築し、実際収集したデータに対して分析を実施する。

### 実施項目②-1主観的データの収集準備・段階的实施

#### 実施内容

2023年に構築した住民の方々とのラポールを基に、住民アンケートおよびインターネット調査を通じた全戸調査を実施し、主観的なデータを収集する。近隣との関係性や信頼度などに関してソーシャルキャピタルの概念などを参照しつつ調査票を作成し、主観的データを収集する。その際、回収率を上げる工夫として、大磯町のサイトにアンケート協力のバナー掲載を依頼、区長連絡会（毎月1回開催大磯町からの全24区の区長への情報連絡会）の場で趣旨等説明して協力依頼、大磯コンソの会員からの「お知らせ」配信希望者に協力依頼（口コミを含めて）等を行う。また、アンケート等ではとらえきれない住民の声をつかみ取るために、保健師や医師や福祉関係専門職の協力を得て、住民の方々への聴き取り（ヒアリングやインタビュー）を実施する。このような実態調査を踏まえて、孤立・孤独を予防する仕組みとして大磯町と連携した実証実験の取り組みの構築を行う。なお、本実施項目におけるリスクとして、住民アンケートの回収率が伸び悩む可能性がある。事前の対策としてオンラインと紙のハイブリッドでの回収を準備する等を行うが、より積極的な呼びかけとして大磯町との連携、町内ポスターの掲示、年度初めのワークショップ等での周知等もあわせて行う。更に、孤立・孤独の当事者に近いケアワーカーの方へご協力の検討を行う。

期間令和6年4月～令和7年3月31日

実施者細田 満和子（東京大学・特任研究員 / 星槎大学・教授）

対象アンケートは全大磯町民、聴き取りは保健師や医師や福祉関係専門職や行政職員等

### 実施項目②-2客観的データの収集準備・段階的实施

#### 実施内容

孤立・孤独リスクを客観的に捉えるデータとして、昨年度の検討に基づき、人の移動を時空間的に捉え、またその移動に含まれる他人との接点を定量化することを試みる。具体的には、スマートフォンアプリケーションを用いて、人

の移動距離と歩数を獲得し、空間的広がりをつかえる。これに、移動に際する時刻情報を加味して、人の移動のパターン化度合いをつかえる。他人との接点定量化に関しては、人の周辺情報の収集を試みる。例えばBluetoothデバイス数や環境音を収集することで、移動に際する他者との接点を定量化可能と考えられる。同時に、経験サンプリング法を用いて、孤立・孤独に関する本人の認知状態を収集し、上記の定量データとの関係を検証する。

期間令和6年4月～令和7年3月31日  
実施者中澤 仁（慶應義塾大学・教授）  
対象大磯町町民

#### 実施項目②-3統合指標化手法の検討

##### 実施内容

実施項目②-1，②-2の実施とともに、そこで得られる可能性のある結果をどう統合し、社会的孤立・孤独のリスク指標として定量化するか、の検討を行う。本年度は昨年度より実施してきた文献調査を引き続き行い、これまで学術的に導出されてきた関連する指標の整理を行い、本研究プロジェクトへの適用を実施する。その上で、実施項目②-1、②-2で得られる独自の調査結果を想定し、統合指標化手法の構築を行い、各項目実施により得られたデータの統合分析を行う。

期間令和6年9月～令和7年3月31日  
実施者米澤 拓郎（名古屋大学・准教授）  
対象文献調査、実施項目②-1、②-2で得られるデータ

#### 当該年度の到達点③

本研究で提案するサービス・モビリティを活用した多形態のコミュニティ接続による社会的孤立・孤独予防モデルを実証するため、3つの実施項目（オンラインコミュニティ構築、オフラインコミュニティ構築、サービス・モビリティ構築）の初期的実施を行い、それらの連携実験の準備を行う。これにより、本提案手法が孤立・孤独予防に効果的に作用しうる可能性の初期的検証へつなげる。

#### 実施項目③-1オンラインコミュニティ構築

実施内容物理的な移動を伴う必要なしに住民の拠り所となりうるオンラインコミュニティを構築する仕組みを検討する。特にオンラインコミュニティのみだけではなく、オフラインコミュニティおよびサービス・モビリティとの効果的な連動が可能なオンラインコミュニティのあり方を検討し、技術調査と要件定義を進め、そのプロトタイプ構築を行う。

期間令和6年4月～令和7年3月31日

実施者米澤 拓郎 (名古屋大学・准教授)  
対象文献調査、大磯町町民

### 実施項目③-2オフラインコミュニティ構築

#### 実施内容

孤立・孤独の防止が大きな課題となる住民群を対象として、実空間にコミュニティを構築する仕組みを検討する。具体的な対象としては、子供、妊婦、高齢者など、人間相互の繋がり希薄化が健康や生命のリスクとなる方を想定する。これらの方に対して、食育、骨密度測定、運動など、孤立・孤独とは直接関係のないテーマのイベントを複数回実施して、参加者の定着を図る。イベントごとにアンケートを実施し、当該テーマの「社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み」としての有効性を検証する。なお、本実施項目が対象とするユーザ層や実証実験の対象コミュニティなどは、全世代とするか対象を絞るかによって効果面やコスト面でのリスクが存在する。大磯町の各コミュニティ活動のヒアリングや、ワークショップにおける大磯町の現状および将来の課題を住民の方と議論し、本研究の対象とするユーザ層は適宜見直しを行うことで、このリスクに対応する。

期間令和6年4月～令和7年3月31日  
実施者中澤 仁 (慶應義塾大学・教授)  
対象 大磯町町民

### 実施項目③-3サービス・モビリティ構築

#### 実施内容

実施項目③-1、③-2で構築するオンラインコミュニティ、オフラインコミュニティへの参加を促す機能を備えたサービス・モビリティの仕組みを検討する。具体的な対象として、大磯町内および近隣市町村で運用が行われるモビリティ事業者をリストアップし、町内外に存在するオンラインコミュニティ、オフラインコミュニティへと接続可能な機能を有するアナログ・デジタルサービスの検討を行い、そのプロトタイプを構築を行う。

期間令和6年4月～令和7年3月31日  
実施者米澤 拓郎 (名古屋大学・准教授)  
対象文献調査、実施項目②-1、②-2で得られるデータ

### 実施項目③-4実証実験

#### 実施内容

実施項目③-1、③-2、③-3のプロトタイプを組み合わせ、大磯町において本研究プロジェクトが提案するサービス・モビリティを通じた多形態

コミュニティの接続手法に関する初期的な実証実験を行うための検討を開始する。大磯町に存在する複数の実コミュニティ、および本プロジェクトで構築するオンラインコミュニティを対象とし、サービス・モビリティを町内で実際に走行させ、その過程で住民を各コミュニティへの自然な参加を促すことができるか、実証準備を行う。なお、本実施項目が対象とするユーザ層や実証実験の対象コミュニティなどは、全世代とするか対象を絞るかによって効果面やコスト面でのリスクが存在する。大磯町の各コミュニティ活動のヒアリングや、ワークショップにおける大磯町の現状および将来の課題を住民の方と議論し、本研究の対象とするユーザ層は適宜見直しを行うことで、このリスクに対応する。

期間令和7年12月～令和7年2月28日  
実施者米澤 拓郎（名古屋大学・准教授）  
対象大磯町民

### (3) 成果

#### 実施項目①

##### 当該年度の到達点

本研究プロジェクトの社会的孤立・孤独のメカニズムの独自の視点を踏まえつつ、行政や住民と対話を行い、社会的孤立・孤独を予防可能な新たな社会像を描出した。まず実施項目①-1において、大磯町のみに限らない国内外他地域においても適用可能な孤立・孤独のメカニズム理解に資する調査を行う。またそのメカニズムに基づき、孤立・孤独の予防に資するサービス・モビリティの活用を踏まえたモデルのプロトタイプをまとめた。

#### 成果

##### 実施項目①-1メカニズム理解

昨年度に引き続き、暮らしの保健室や多世代食堂、病院や福祉施設、地域包括ケアセンターなどの社会的孤独・孤立を防ぐ場づくりの現場においてフィールドワークを行い、メカニズムを理解するための情報収集を行った。また研究倫理に抵触しない形で適宜論文や書籍の形にまとめて出版したり、学会発表を行った。コミュニティの孤独や孤立を予防し、移動の自由を保障するためには、人々のつながりや社会参加の実態を深く理解する必要があるが、大磯町には民生委員・児童委員、大磯市（いち）などを中心とした相互扶助の仕組みや地域行事やイベントがあることが分かった。これは、ソーシャルキャピタルの概念で表せるものであると考えられる。さらなるヒアリングなどで質的調査を進め、地域住民がどのような関係性の中で生活しているか、日常的な相互扶助や信頼がどのように形成されているかを探ってゆく。また、特に移動の自由に関しては、移動手段の有無だけでなく、移動先での受け入れられ感や居場所意識の有無も重要な視点となるので、物理的なアクセスと心理的なつながりの両面から、社会資源がどのように機能しているか、また排除や格差が生じていないかという観点からも分析を進め、孤独・孤立のメカニズムを探り、その解消法を考察につなげる。

## 実施項目①-2：社会像の描出

本年度は大磯町において住民参加のシンポジウムを主催するとともに、チーム内、チーム外とも様々な議論を行い、あるべき社会像の描出を行った。

### 【大磯市】

2024年5月19日に大磯町で月に1回開催される大磯市において、本プロジェクトのブースを出店し、様々な地域コミュニティの方々とふれあい、本プロジェクトの背景や取り組みに関して意見交換を行えた。



### 【大磯町シンポジウム】

2024年6月22日に大磯町ノジマスクエアにおいてシンポジウムを開催した。シンポジウムは2部構成となっており、下記ポスターの通りのプログラムとして実施した。



シンポジウムでは約100名の方にご来場いただき、本プロジェクトの取り組みや構築中のシステムのデモンストレーションを行うとともに、地域の課題や未来のあるべき姿に関して町民の皆様を交え議論を行った。その後本シンポジウムもきっかけとして居住マンション内で新しいコミュニティの取り組みをはじめたという住民からのご連絡をいただくなど、それぞれの立場で様々な刺激を得ることができた。当日の様子をおさめた写真を下記に記す。



これらの取り組みから、本プロジェクトにおいて目指す社会像として、「『いつかつながる』ために、人々の日常の導線のなかに地域コミュニティがさりげなく寄り添える社会」という社会像の描出へとつながった。内閣府の調査により、孤独予備軍（ときどき孤独を感じている人）が国民のおよそ40%存在していることが判明し、そのマスのボリュームに対していかにアプローチを行うかが重要な課題であることがわかる。また地域住民の方々や行政職の方々と話しても、住んでいても実際どういうコミュニティが地域にあるのか、また名前はしっけていても実際の様子は全く知らないなど、行動変容につながる最初のきっかけである「知る」こと自体ができていないことがわかる。よって本研究では、住民に特別な取り組みを求めることなく、普段の日常を生活しながらも、地域に存在するコミュニティの存在が自然に伝わり、必要に応じて実際につながる背中を後押しを住民側・コミュニティ側がお互いに行えるような社会像を描出した。

## 実施項目②

### 当該年度の到達点

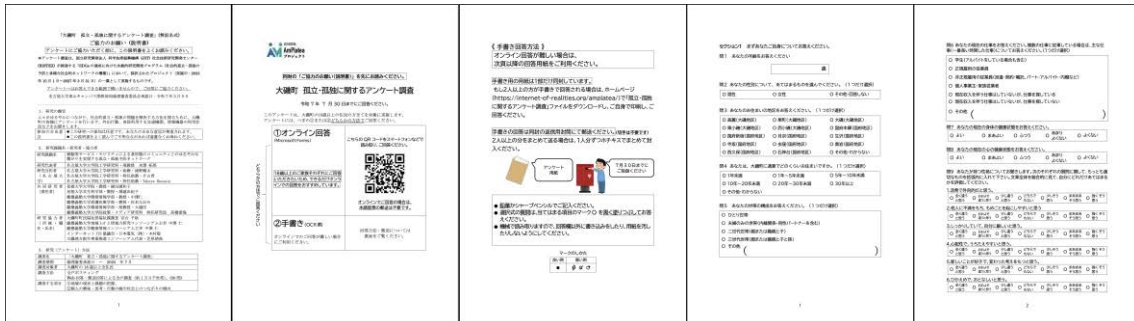
大磯町における社会的孤独・孤立に陥るリスクを理解するため、主観的データおよび客観的データの収集方法を詳細化し、実施体制を整えるとともに、その実施の準備を行った。これにより、社会的孤独・孤立に関する大磯町の特性を明らかにするとともに、他地域にも展開可能なデータ分析、モデル化を検討した。さらに、主観的・客観的に得られるデータの統合分析手法および指標化の手法を検討し、部分的に収集されたデータに対して分析を開始した。

## 成果

### 実施項目②-1：主観的データの収集準備・段階的实施

訪問看護師、保健師、介護福祉士、社会福祉士、民生委員・児童委員など、地域の医療福祉のキーパーソンへの複数回のヒアリングを実施し、当該地域での課題についてお聞きし、全戸アンケートの調査項目の検討を行った。大磯町における全町民調査を実施して、結果の分析を行う。アンケートでは、日常的な人間関係の有無、社会参加の頻度、相談相手の存在、主観的な孤独感などを問う項目を設けたので、これらを年齢、居住形態、移動手段などの背景要因との関連で把握し、リスク要因との関連を分析できると考えられる。これにより、孤立・孤独の予兆を早期に捉える指標の開発を目指すことが出来ると考えられる。実際の実施に向けて、アンケート調査票の作成と、それに基づいた名古屋大学倫理審査委員会の許可を得た。アンケート調査票では地域の交通網に関する設問、普段の外出に関する質問、パーソナリティや知的好奇心に関する質問など、興味・思考・行動の幅と孤立・孤独感との関係を明らかにするための調査項目を30問の質問として整理した。来年度のはじめにはおよそ

1万3000戸にアンケート配布を行い、その結果の分析を行う予定である。調査票の一部を下記に記す。



## 実施項目②-2：客観的データの収集準備・段階的实施

スマートフォンを用いた孤立・孤独尺度化に関する先行研究として[1]がある。この先行研究ではUCLAの大学生160名を対象に1学期間のデータ収集を実施し、学期初・終わりにUCLA Loneliness Scaleを用いて孤独感スコアを取得した。スコアをもとに高孤独群と低孤独群に分類し、合計77,805個の特徴量を生成した上で、機械学習により孤独感の二値分類 (LOSO) : 80.2%、および孤独感レベル変化検出 (LOSO) : 88.4%の精度を得ている。

[1] Doryab, A., Villalba, D. K., Chikersal, P., Dutcher, J. M., Tumminia, M., Liu, X., ... & Dey, A. K. (2019). Identifying behavioral phenotypes of loneliness and social isolation with passive sensing: statistical analysis, data mining and machine learning of smartphone and fitbit data. *JMIR mHealth and uHealth*, 7(7), e13209.

これを踏まえて本研究では2025年に予定される大磯町での実証実験に向け、物理空間および仮想空間での行動量が孤独感に影響を与えるとの仮説を立て準備を進めた。この仮説を立証するため、AWAREアプリケーション (右図) によるスマートフォンセンシング (アクティビティ、GPS、歩数、気圧、バッテリー、Wi-Fi、Bluetoothなど) に加え、以下のアンケート項目を設定した。

- UCLA Loneliness Scale (日本語版)
- 知的好奇心尺度
- 日本語版TIPI (性格特性)
- GAD-7 (不安感)
- PANAS (主観的感情、1日3回実施)

これらの情報を獲得するシステムの構築を完了し、試験的なデータ収集を進めた。2025年度は、200人以上の被験者にご協力いただき、1ヶ月間×2回のデータ獲得実験を計画している。各被験者には5,000円相当の報酬をお渡しすることを検討し、



このことが被験者の行動に与えるバイアスについても検討した。

### 実施項目②-3：統合指標化手法の検討（米澤）

実施項目2-1および2-2の結果を見据え、統合的な指標を開発するための技術検討を行った。まず、名古屋大学Gでは大磯町の客観的データ分析として協力企業が保有するスマートフォンアプリを通じた位置情報データの解析を進めた。その際、大磯町のそれぞれの地域ごとに外出の頻度や外出先（大磯町内であるか、大磯町外であるかなど）など、外出パターンによる地域モデリングを行い、その結果のクラスタリング分析を行った。この分析を通じ地域ごとの特性を把握するとともに、実施項目2-1,2-2の結果と統合した分析を来年度に進める予定である。なお、本研究の結果は学会でポスター発表を行った。

・寺島青, 高橋愛海, 庄子和之, 河口信夫, 杉本なおみ, 米澤拓郎, 社会的孤立・孤独の予防・低減を目的とする時空間移動情報活用型保健医療福祉連携基盤技術の開発, 日本保健医療福祉連携教育学会第17回学術集会, 埼玉県立大学 埼玉県越谷, 2024年11月10日

ポスター発表の抄録を下記に記す：

【目的】社会的孤立・孤独の予防・低減を目的とする保健医療福祉連携活動において、従来は住民票などの既存かつ静的なデータに基づき高リスク群地区の抽出を行ってきた。本研究では、これに加え携帯通信機器から得られる大規模かつ匿名化された時空間移動データを用いて地区ごとの特性を網羅的に可視化し描出する基盤技術を開発し、保健医療福祉職の協働を促進する形で提供することにより、根拠に基づく地域診断と施策展開に資することを目的とした。

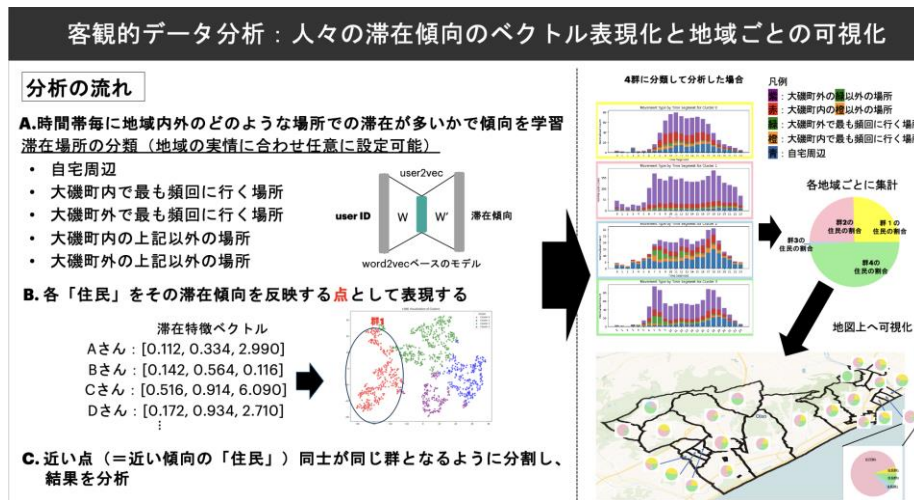
【方法】携帯通信機器から得た匿名GPSデータから特定地域内の移動パターンを検出して地図上に点描する地区別モデリング手法を開発し、当研究班の協力自治体である神奈川県中郡大磯町全15地区に適用した。

【結果】空間情報と時間情報を併せ持つデータを利用し、日中（9:00-17:00）「全く移動しない」「地区内の移動しかしない」等の特定の群の割合が高い地区を自動的に抽出し地図上に描出する機構の設計・実装を行った。

【考察】人々の活動が本来活発である日中時間帯において「全く移動しない」群（ひきこもり、移動困難者を含む可能性あり）や「限られた範囲内の移動しかしない」群（通院・買い物など必要最低限の移動のみしている可能性あり）の割合が高い、すなわち社会的孤立・孤独のリスクが高い可能性のある地区を同定し優先的・重点的に介入することが可能になる。

また本基盤では、データ検出単位を最小50メートル四方から自由に設定でき、山間部ではその範囲を拡大するなどの個別化を可能とした。これに医療機関や移手段などの情報を追加すれば、移動検診・販売車等の計画に際し地域実態に即したデータ解釈や施策提案が実現する。

さらに各職種独自の所見や各種統計、実地で得た情報などを地図上で共有することにより、効率的かつ活発な保健医療福祉連携活動が人材資源への過剰な負荷なく実現すると期待される。



### 実施項目③

#### 当該年度の到達点

本研究で提案するサービス・モビリティを活用した多形態のコミュニティ接続による社会的孤立・孤独予防モデルを実証するため、3つの実施項目（オンラインコミュニティ構築、オフラインコミュニティ構築、サービス・モビリティ構築）の初期的実施を行い、それらの連携実験の準備を行った。これにより、本提案手法が孤立・孤独予防に効果的に作用しうる可能性の初期的検証へつなげた。

### 成果

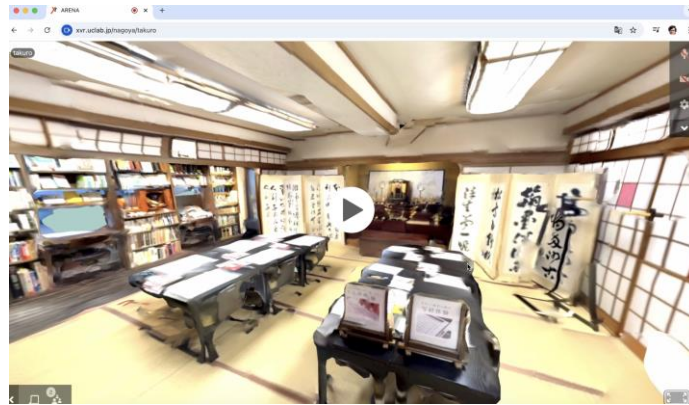
#### 実施項目③-1オンラインコミュニティ構築（米澤）

孤立・孤独予防に資するオンラインコミュニティプラットフォームの技術的要件を整理し、そのプロトタイプ実装を行った。特に本研究では情報技術の発展によりその普及と利用が見込まれつつあるメタバース技術に着目し、オンラインコミュニティとしての可能性を探った。その要件として、

(1) 特別なソフトウェアをインストールする必要がなく、誰しものが様々な情報端末から参加できること

(2) 参加する側も、受け入れる側も、お互いが楽しめる空間デザインであること

の2点を意識し、システムのプロトタイプ実装を行った。その例として、大磯町の交流スペースである東光院の海近寺集のメタバース化などを行った。本メタバースにはウェブブラウザからアクセス可能であり、基本機能としてアバターを介したチャットやビデオ通話も行うことができるようになっている。様々な無料ツールと連携することにより、任意の空間を瞬時にメタバース化して利用することもできる。同プロトタイプに関して、講演やデモンストレーションを通じて、その利用の拡大を図るとともに、関連プロジェクト（JST CREST）の取り組みと連携を行い、異なる文化の相互理解につなげるための基本コンセプトとして利用を図った。メタバース化された東光院のスクリーンショットを下記に記す。同技術をベースとして、JST RISTEX のソリューション創出フェーズ「ピアサポートの価値創造と普及による新しい医療社会モデル構築にむけた展開」プロジェクトに技術協力を行う予定であり、他プロジェクトへの波及も期待できる。



### 実施項目③-2 オフラインコミュニティ構築

本プロジェクト遂行のため、ワークショップやコミュニティ訪問などを通じ、大磯町の関係機関と協力関係の構築や調整を行った。訪問先としては、東光院、西武地域包括ケアセンター、かたつむりの家、大磯病院、民生・児童委員、などが含まれる。

#### 大磯町の現状、課題ヒアリング



東光院



西部地域包括  
ケアセンター



かたつむりの家



大磯病院



民生・児童委員



大磯町役場

さらに今後の他地域への展開のため、神奈川県藤沢市、愛知県新城市、北海道美唄市などを訪問し、協力関係を構築した。神奈川県藤沢市では Fujisawa サスティナブル・スマートタウンと本プロジェクトとの連携を進めることで、住民自治会にご承認をいただいた。藤沢市からはコミュニティ団体リストを整理・ご提供いただき、本プロジェクトの取り組みに活用させていただくこととなった。また、東京都豊島区では 2026 年度開設の新保健所に本プロジェクトで構築を進めるシステムの導入をご検討いただき、予算化を進めていただいている。先行し、本プロジェクト活用のためのコミュニティリストなどをご作成いただいている。



出典：<https://www.city.toshima.lg.jp/471/kenko/kenko/251101.html>

### 実施項目③-3サービス・モビリティ構築

サービス・モビリティ事業者と議論を行い、本プロジェクト達成に向けて、協力関係の構築を行った。特に、神奈川県キッチンカー協議会の事務局 NPO 代表と協力関係を構築し、大磯町で開催されたシンポジウムなどを通じて意見交換を行った。また、大磯町で移動スーパーを営む「とくし丸」の担当者の方とつながりを構築し、本プロジェクトにおける協力体制構築に向けて議論を開始している。特に本年度はサービス・モビリティに搭載するシステムとして、日常を暮らしながらもコミュニティの Awareness を高めることができる「コミュニティ・コンパス」というシステムのコンセプトを確立し、その実装例として体組成計を利用したコミュニティ情報提示システムの構築を行い、あわせて特許出願を行った。このシステムを学会発表や複数の展示会で紹介を行うとともに、現在論文投稿を進めている。ヘルスコミュニケーション学会では最優秀ポスター発表賞を受賞した。その抄録と、システムの利用の様子を下記に記す：

市川直人, 片山晋, 河口信夫, 高橋愛海, 杉本なおみ, 中澤仁, 米澤拓郎, 「社会的孤立・孤独の解消・予防を目的とするヘルスマーケティング手法の開発：生成AIを用いた体組成データに基づく地域活動マッチングシステム」, 2024年9月29日, ヘルスコミュニケーションウィーク2024

#### 【背景・目的】

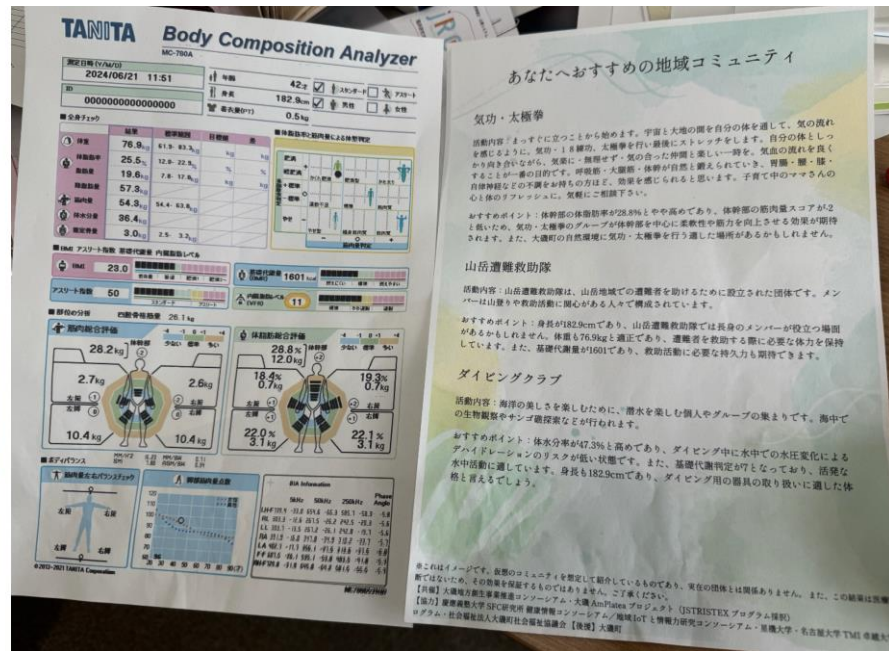
社会的孤立・孤独は心身の健康に重大な悪影響を及ぼす。その予防・解消を目指すヘルスマーケティング戦略の一つに地域活動団体を住民に紹介し参加を促す手法がある。従来、自治体ホームページ上での公開や個別紹介などの取り組みが行われてきたが、情報が探づらい、個別紹介は労働集約的であり大規模イベント等で実施するには人的資源が足りない、本人の希望だけに基づき紹介される団体は実際のニーズとは合致しない場合があるなどの課題がある。そこでその解決を目的とし、生成AIが利用者の身体データに基づき活動団体を推奨する仕組みを構築した。

【方法】対象は神奈川県大磯町とした。地域活動団体の情報は同町役場作成資料・公式ホームページから抽出し生成AIが解読可能な形式にて「団体一覧」を作成した。一方「利用者情報」として、身体データ（体重、体脂肪率、脂肪量、除脂肪量、筋肉量、体水分量、推定骨量、BMI、基礎代謝量、内臓脂肪レベル、アスリート指数、部位別筋肉量評価）はPCがシリアル通

信により体組成計から直接取得する一方、属性(年齢・性別・身長)は利用者本人の申告に基づき別途入力する仕様とした。生成AIはChatGPT(3.5版・4.0版)を使用した。「利用者情報」と「団体一覧」双方への参照が埋め込まれた指示文を生成AIに送信し、推奨する団体名と活動内容を印刷させる形の実装を行った。

【結果・考察】体組成測定開始2分以内に1利用者あたり3件の団体を推奨する仕組みが完成した。ChatGPT 4.0版では推奨される団体が利用者毎にさほど異ならなかったが、3.5版ではより多様な団体が推奨された。今回の実装では、身体データに基づきどの団体を推奨するかは生成AI次第であり、医療的に最適な団体が常に選定されるとは限らない。また利用者自身の希望も加味しなかったことから、無自覚の潜在的ニーズに基づく偶発的参加機会を生む可能性がある一方、参加動機が刺激されない危険性もある。

【結論】社会的孤立・孤独の予防・解消の一助となるべく、身体データに基づき自動的に地域活動団体を推奨する仕組みを構築した。これにより大規模イベント等でも簡単に住民と団体のマッチングを行うことが可能になる。推奨結果がChatGPTの版により異なる点については、孤立・孤独の予防・解消という目的に沿った検証が必要である。また、団体の選定を生成AI任せにせず、正しい医学情報に基づくよう今後改良の予定である。



### 実施項目③-4 実証実験

実施項目③-3 などを通じて実証実験を行うためのシステム開発を行い、学会発表やシンポジウムで発表を行った。更に、サービス・モビリティにおける検診車の活用を想定し、「子宮頸がん」検診車を想定したPR動画の作成に関する研究に取り組み、SFC Open Research Forumでの展示と慶應SFC学会第24回学術交流大会にて発表を行い、奨励賞を受賞した。本年度は実証実験実施に向け倫理審査委員会への申請を行い、許可を得たため、次年度では実際に実証実験を進める予定である。

(4) プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

**Q1.興味・行動の幅と社会的孤独・孤立の尺度との関係性**

回答文: 文献調査より個人の性格と社会的孤独・孤立の尺度との関係性が示唆されており、性格と知的好奇心などとの関係性も既存研究で調査されていることから、本研究の仮説が支持される可能性を確認。現在全戸アンケート調査実施の準備を進めており、来年度にその関係性を明らかとする予定である。

**Q2.サービス・モビリティが人々をゆるやかにつなぐメディアとなりえるか**

回答文: 自治体や関係機関とのヒアリングにより、交通網の衰退が外出行動に影響を与え、つながりに影響を与えることが示唆されている。よってサービス・モビリティの活用により人々をゆるやかにつなぐメディアとしての可能性が期待できる。

(5) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

- ・各実施課題に関し、それぞれの基礎的検討および実施準備を達成できた。ただし、倫理審査に時間を要したため、当初予定していたアンケート実施等は開始できず、翌年度はじめの実施となってしまった。翌年度は速やかに実施できるよう調整を進めている。
- ・一方で、本研究のサービス・モビリティに搭載する「コミュニティ・コンパス」のプロトタイプ実装を達成し、学会やイベント等で展示を行った。結果、他自治体への展開も先行して行うことができた。

**2-5. 会議等の活動**

年月日	名称	場所	概要
2024年4月2日	大磯シンポジウム 打ち合わせ (本田先生)	オンライン	大磯シンポジウムについて 慶應義塾大学チームと打ち合わせ
2024年4月12日	大磯シンポジウム 打ち合わせ	オンライン	名古屋大学、慶應義塾大学、東京大学、星槎大学、大磯コンソと大磯シンポジウムに向けての打ち合わせ
2024年4月19日	倫理審査委員会に関する打ち合わせ	オンライン	慶應義塾大学チームと倫理審査委員会書類作成に関する打ち合わせ
2024年4月21日	大磯市に参加	大磯港	翌月の大磯市出展の為の現場調査
2024年4月23日	倫理審査委員会に関する打ち合わせ	オンライン	慶應義塾大学チームと倫理審査委員会書類作成に関する打ち合わせ

2024年4月23日	プロジェクト打ち合わせ(細田先生)	オンライン	プロジェクト進捗状況について、東京大学・星槎大学の打ち合わせ
2024年5月1日	大磯市に関する打ち合わせ(本田先生)	オンライン	慶應義塾大学チームと大磯市の出展内容の打ち合わせ
2024年5月7日	倫理審査委員会に関する打ち合わせ	オンライン	慶應義塾大学チームと倫理審査委員会書類作成に関する打ち合わせ
2024年5月15日	大磯市に関する打ち合わせ(本田先生)	オンライン	慶應義塾大学チームと大磯市の出展内容の打ち合わせ
2024年5月19日	大磯市に出展	大磯港	名古屋大学、慶應義塾大学大磯市にてプロジェクト普及の為、ブース出展
2024年5月22日	倫理審査委員会に関する打ち合わせ	名古屋大学	名古屋大学内の倫理審査委員会書類作成に関する打ち合わせ
2024年5月27日	RISTEX全体ミーティング	オンライン	プロジェクト全体の進捗状況共有、今後の計画の議論
2024年6月4日	倫理審査委員会に関する打ち合わせ	オンライン	名古屋大学、慶應義塾大学、東京大学、星槎大学と倫理審査委員会に関する打ち合わせ
2024年6月10日	倫理審査委員会に関する打ち合わせ(杉本先生)	慶應義塾大学	慶應義塾大学チームと倫理審査委員会に関する打ち合わせ
2024年6月18日	大磯シンポジウム打ち合わせ	オンライン	名古屋大学、慶應義塾大学、東京大学、星槎大学、大磯コンソと大磯シンポジウムに向けての打ち合わせ
2024年7月12日	RISTEX全体ミーティング	オンライン	プロジェクト全体の進捗状況共有、今後の計画の議論
2024年7月16日	RISTEX全戸アンケート打ち合わせ	名古屋大学	名古屋大学チームにてRISTEX全戸アンケート作成に関する打ち合わせ
2024年7月22日	RISTEX全戸アンケート打ち合わせ	名古屋大学	名古屋大学チームにてRISTEX全戸アンケート作成に関する打ち合わせ
2024年7月25日	RISTEX全戸アンケート打ち合わせ	名古屋大学	名古屋大学チームにてRISTEX全戸アンケート作成に関する打ち合わせ

2024年8月2日	RISTEX 全戸アンケート打ち合わせ	オンライン	名古屋大学、慶應義塾大学、東京大学、星槎大学とRISTEX 全戸アンケート作成に関する打ち合わせ
2024年8月19日	プロジェクト打ち合わせ(杉本先生)	オンライン	プロジェクト進捗状況について、慶應義塾大学チームとの打ち合わせ
2024年8月20日	倫理審査委員会に関する打ち合わせ(佐々木さん)	オンライン	慶應義塾大学チームと倫理審査委員会に関する打ち合わせ
2024年8月23日	倫理審査委員会に関する打ち合わせ	名古屋大学	名古屋大学内での倫理審査委員会に関する打ち合わせ
2024年9月2日	プロジェクト打ち合わせ(杉本先生)	オンライン	プロジェクト進捗状況について、慶應義塾大学チームとの打ち合わせ
2024年9月2日	RISTEX 全体ミーティング	オンライン	プロジェクト全体の進捗状況共有、今後の計画の議論
2024年9月12日	プロジェクト打ち合わせ(杉本先生)	オンライン	プロジェクト進捗状況について、慶應義塾大学チームとの打ち合わせ
2024年9月13日	プロジェクト打ち合わせ(杉本先生)	慶應義塾大学	プロジェクトの今後の展開について慶應義塾大学チームとの打ち合わせ
2024年9月20日	大磯訪問	大磯町保健センター	RISTEX 全戸アンケートに関する打ち合わせ
2024年9月27日	学会発表に関する打ち合わせ(杉本先生)	慶應義塾大学	名古屋大学チームと慶應義塾大学チームでポスター発表に関する打ち合わせ
2024年9月28日	ヘルスコミュニケーションウィーク2024にてポスター発表	慶應義塾大学	名古屋大学チームと慶應義塾大学チームでプロジェクトに関するポスターを発表
2024年10月4日	ORF出展に関する打ち合わせ	慶應義塾大学	慶應義塾大学内でSFC ORFの出展内容の打ち合わせ
2024年10月11日	プロジェクト打ち合わせ(杉本先生)	オンライン	プロジェクト進捗状況について、慶應義塾大学チームとの打ち合わせ
2024年10月11日	ORF出展に関する打ち合わせ	慶應義塾大学	慶應義塾大学内でSFC ORFの出展内容の打ち合わせ
2024年10月18日	ORF出展に関する打ち合わせ	オンライン	慶應義塾大学内でSFC ORFの出展内容の打ち合わせ

2024年10月25日	ORF出展に関する打ち合わせ	慶應義塾大学	慶應義塾大学内でSFC ORFの出展内容の打ち合わせ
2024年10月25日	学会発表に関する打ち合わせ(杉本先生)	オンライン	名古屋大学チームと慶應義塾大学チームでポスター発表に関する打ち合わせ
2024年10月30日	ORF出展に関する打ち合わせ	慶應義塾大学	慶應義塾大学内でSFC ORFの出展内容の打ち合わせ
2024年10月31日	倫理審査委員会に関する打ち合わせ(杉本先生)	オンライン	慶應義塾大学チームと倫理審査委員会に関する打ち合わせ
2024年11月2日	学会発表に関する打ち合わせ(杉本先生)	オンライン	名古屋大学チームと慶應義塾大学チームでポスター発表に関する打ち合わせ
2024年11月10日	日本保健医療福祉連携教育学会にてポスター発表	埼玉県立大学	名古屋大学チームと慶應義塾大学チームで、プロジェクトに関するポスターを発表
2024年11月21日	プロジェクト打ち合わせ(小熊先生)	慶應義塾大学	慶應義塾大学小熊祐子先生とプロジェクトに関する情報交換と打ち合わせ
2024年11月22日	ORF出展の前日準備	慶應義塾大学	SFC ORFにてブースの設置
2024年11月23-24日	ORFに出展	慶應義塾大学	慶應義塾大学チームと名古屋大学チームでプロジェクト普及のため、SFC ORFにブース出展
2024年11月25日	プログラム全体会議	TKPガーデンシティPREMIUM京橋ホール	プログラム全体会議の参加・発表
2024年11月26日	プロジェクト打ち合わせ(藤沢市役所)	藤沢市役所	藤沢市役所・Fujisawa SSTコンソーシアムと今後の横展開に関する情報交換
2024年12月6日	RISTEX全体ミーティング	オンライン	プロジェクト全体の進捗状況共有、今後の計画の議論
2024年12月17日	学会誌投稿に関する打ち合わせ	オンライン	プロジェクトに関する学会誌投稿に関する打ち合わせ
2024年12月24日	プロジェクト打ち合わせ(本田先生)	オンライン	慶應義塾大学チームとプロジェクトに関する打ち合わせ
2025年1月10日	プロジェクト打ち合わせ(藤沢市役所)	対面	藤沢市役所・Fujisawa SSTコンソーシアムと今後の横展開に関する意見交換

2025年1月15日	プロジェクト打ち合わせ(本田先生)	オンライン	慶應義塾大学チームとプロジェクトに関する打ち合わせ
2025年1月22日	プロジェクト打ち合わせ(杉本先生)	オンライン	プロジェクト進捗状況について、慶應義塾大学チームとの打ち合わせ
2025年1月22日	RISTEX PJ戦略会議	オンライン	RISTEX PJ戦略会議の参加・発表
2025年1月29日-31日	WELL-BEING TECHNOLOGY 2025	東京ビックサイト	名古屋大学、慶應義塾大学でWELL-BEING TECHNOLOGY 2025への出展
2025年2月9日	藤沢市孤立孤独シンポジウム参加(杉本先生)	藤沢市湘南台文化センター	藤沢市孤立孤独シンポジウムにて情報収集・意見交換
2025年2月21日	RISTEX 全体ミーティング	オンライン	プロジェクト全体の進捗状況共有、今後の計画の議論
2025年3月4日	プロジェクト打ち合わせ(杉本先生)	慶應義塾大学	プロジェクト進捗状況について、慶應義塾大学チームとの打ち合わせ
2025年3月18日	SST, SFC打ち合わせ	オンライン	Fujisawa SSTコンソーシアムと今後の横展開に関する意見交換
2025年3月18日	プロジェクト打ち合わせ	オンライン	名大内チームでプロジェクトに関する打ち合わせ
2025年3月18日	RISTEX 全戸アンケート打ち合わせ	オンライン	名古屋大学、慶應義塾大学、東京大学、星槎大学とRISTEX 全戸アンケート作成に関する打ち合わせ
2025年3月19日	プロジェクト打ち合わせ(杉本先生)	名古屋大学	プロジェクト進捗状況について、慶應義塾大学チームとの打ち合わせ

### 3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

- ・ 複数のシンポジウム、展示会などでデモンストレーション
  - 大磯市
  - 大磯町シンポジウム
  - SFC Open Research Forum



- ウェルビーイングテクノロジー展



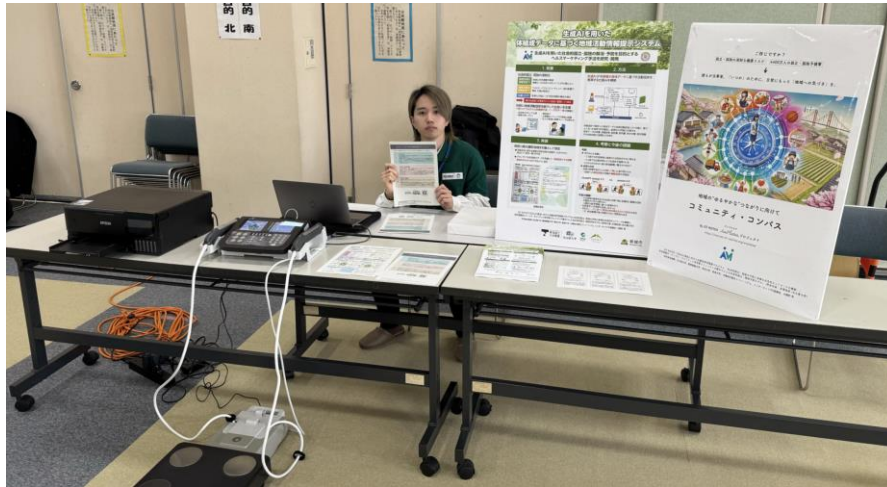
- 名古屋大学GREMOシンポジウム



- 新城市 名大主催講座・体験会「ライフスタイル・健康を楽しく考える」

**会場レイアウト**

名古屋大学プロジェクト 講座・体験会  
**ライフスタイル・健康を楽しく考える**



・東京都豊島区の新保健所において2026年度よりコミュニティ・コンパスシステムの常設導入を計画中

#### 4. 研究開発実施体制

##### (1) 名古屋大学グループ (米澤拓郎)

名古屋大学大学院工学研究科

- ・ 実施項目

研究開発要素1

「社会的孤立・孤独メカニズム理解と、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出」

1-2 社会像描出

研究開発要素2

「人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手法(指標等)の開発」

2-2 統合指標化

研究開発要素3「社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み」

3-1 オンラインコミュニティ構築

3-3 移動型サービス・モビリティ構築

3-4 実証実験

グループの役割の説明 本グループにおいては、本プロジェクトにおける社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出をそれに陥るリスクの指標化とともに、研究代表グループとして実施する。特に、物理空間および仮想空間における移動性の低下による社会的孤立・孤独拡大の懸念を解決するための、サービスモビリティと多形態のコミュ

ニティを接続した孤立・孤独予防モデルを構築し、実証実験を通じその効果を明らかにする。

## (2) 東京大学グループ (細田満和子)

東京大学 医科学研究所

- 実施項目

研究開発要素1

「社会的孤立・孤独メカニズム理解と、社会的孤立・孤独を生まない新たな社会像の描出」

1-1 メカニズム理解

研究開発要素2

「人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手法(指標等)の開発」

2-1 アンケート調査・分析

グループの役割の説明本グループにおいては、物理空間および仮想空間における移動性の低下による社会的孤立・孤独拡大の懸念を解決するため、孤立・孤独感と主観的に測定可能な興味・行動の枠との関係性に基づいたメカニズム理解を目指す。住民アンケートおよびインターネット調査を通じた主観的なデータをもとにした分析を行う。また孤立・孤独を予防する仕組みとして星槎大学、大磯町と連携した実証実験の取り組みの構築を行う。

## (3) 慶應義塾大学グループ (中澤 仁)

慶應義塾大学 環境情報学部

- 実施項目

研究開発要素2

「人や集団が社会的孤立・孤独に陥るリスクの可視化と評価手法(指標等)の開発」

2-2 行動データ収集・分析

研究開発要素3「社会的孤立・孤独を予防する社会的仕組み」

3-2 オフラインコミュニティ構築

グループの役割の説明本グループにおいては、物理空間および仮想空間における移動性の低下による社会的孤立・孤独拡大の懸念を解決するため、孤立・孤独感と客観的に測定可能な興味・行動の枠との関係性に基づいたメカニズム理解を目指す。特にスマート

端末等を通じて得られた活動量などの客観的なデータをもとにした分析を行う。また孤立・孤独を予防する仕組みとして、つながりを生むオフラインコミュニティの構築を設計する。

## 5. 研究開発実施者

### 名古屋大学グループ (リーダー氏名米澤 拓郎)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
米澤 拓郎	ヨネザワタク ロウ	名古屋大学	大学院工学研 究科	准教授
浦野 健太	ウラノケンタ	名古屋大学	大学院工学研 究科	助教
片山 晋	カタヤマシン	名古屋大学	大学院工学研 究科	特任助教
石崎 冴香	イシザキサヤ カ	名古屋大学	大学院工学研 究科	技術補佐員
Tahera Hossain	タヘラホサイ ン	名古屋大学	未来社会創造 機構	特任助教
市川 直人	イチカワナオ ト	名古屋大学	大学院工学研 究科	大学院生
寺島 青	テラシマハル	名古屋大学	大学院工学研 究科	大学院生
渡辺 圭貴	ワタナベヨシ キ	名古屋大学	大学院工学研 究科	大学院生

### 東京大学グループ (リーダー氏名細田 美和子)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
細田 満和子	ホンダ ミワ コ	東京大学 星槎大学	所長オフィス 教育学研究科	特任研究員 教授
堀越 由起子	ホリコシ ユ キコ	星槎大学	共生科学部	教授

### 慶應義塾大学グループ (リーダー氏名中澤 仁)

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
中澤 仁	ナカザワ ジン	慶應義塾大学	環境情報学部	教授
大越 匡	オオコシ タダシ	慶應義塾大学	環境情報学部	准教授

佐々木 航	ササキ ワタル	慶應義塾大学	政策・メディア ア研究科	特別研究員
杉本 なおみ	スギモト ナオミ	慶應義塾大学	看護医療学部	教授
本田 由佳	ホンダ ユカ	慶應義塾大学	政策・メディア ア研究科	研究補助員
高橋 愛海	タカハシ マナミ	慶應義塾大学	政策・メディア ア研究科	研究員

## 6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

### 6-1. シンポジウム等

日時	名称	主催者	参加人数	概要
2024 年6月 22日	大磯deうごくDay	本プロ ジェク ト	約100名	本プロジェクトの取り組みを紹介するとともに、住民の皆さまと大磯における課題や将来像などの議論を行う。
2024 年11月 12日	サイエンストーク 「ゆるやかにつながる社会へ向けて ～情報+モビリティ技術で、できること」	名古屋 大学	約20名	本プロジェクトの取り組みを紹介するとともに、参加者の方と社会的孤立・孤独に関するグループ議論を行う
2024 年11月 23日、 24日	SFC Open Research Forum	慶應義 塾大学 SFC	約150名 (本ブー スへの訪 問)	本プロジェクトの取り組みを紹介するとともに、参加者の方と意見交換を行う

### 6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

(2) ウェブメディアの開設・運営

・AmPlatea Project <https://internet-of-realities.org/amplatea/>

(3) 学会 (6-4.参照) 以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

・米澤拓郎 (名古屋大学), リアリティのインターネットと社会課題解決に向けて, 科学研究費補助金 学術変革領域(A) 社会変革の源泉となる革新的アルゴリズム基盤の創出

と体系化AFSA 2024年度第1回領域集会, 北海道大学, 2024年6月16日

- ・米澤拓郎 (名古屋大学), 新たなリアリティとモビリティの交差とは ~現実技術の研究開発と社会課題解決 (社会的孤立・孤独予防) に向けて, インターネットITS協議会情報交換会, 2024年7月10日
- ・細田満和子 (東京大学/星槎大学), 脳卒中の社会学—社会の中で共に生きる—, NPO法人学びあい—リハビリテーションから社会への実装的課題—, 詳細: 共生社会作りのための対話会, 年月日: 2024年9月18日, 場所: オンライン
- ・米澤拓郎 (名古屋大学) サイエンストーク: ゆるやかにつながる社会へ向けて ~情報+モビリティ技術で、できること, 名古屋大学 Tokai Open Innovation Complex (TOIC), 2024年11月12日 レポート:  
[https://note.com/nagoya\\_ura/n/n8c3b7325b87f](https://note.com/nagoya_ura/n/n8c3b7325b87f)

### 6-3. 論文発表

(1) 査読付き ( 1 件)

●国内誌 ( 0 件)

●国際誌 (1件)

- ・細田満和子. "Transforming the Patient-Provider Relationship Through Digitalized Peer Support in Japan". Health Systems & Reform, 10(2), Volume 10, 2024 - Issue 2, 2024年. <https://doi.org/10.1080/23288604.2024.2392306>.

(2) 査読なし (0件)

### 6-4. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演 (国内会議 1 件、国際会議 3 件)

- ・米澤拓郎 (名古屋大学), Internet of Realities: 現実技術とその応用, 情報処理学会第82回ユビキタスコンピューティングシステム研究会, 2024年5月11日
- ・Takuro Yonezawa (Nagoya University), Towards the Internet of Urban Realities, ACM SIGSPATIAL2024, Atlanta, GA, USA, 2024年10月29日
- ・Takuro Yonezawa (Nagoya University), Internet of Realities: Vision and Challenges, 17th International Conference on COMMunication Systems & NETWORKS, Bangalore, India, 2025年1月6日
- ・Takuro Yonezawa (Nagoya University), Internet of Realities A Future of Connected

People and Spaces, the 59th Meeting of the Asia Pacific Advanced Network  
(APAN59), 2025年3月5日

(2) 口頭発表 (国内会議 4 件、国際会議 5 件)

- ・ 庄子 和之, 寺島 青, 田村 直樹, 片山 晋, 浦野 健太, 米澤 拓郎, 河口 信夫,  
DiverCityMeter: 大規模移動データによる生活パターン分析を通じた都市空間の多様  
性算出手法, 情報処理学会第112回モバイルコンピューティングと新社会システム研究  
会, 愛媛大学, 2024年9月26日 (優秀論文賞)
- ・ 龍見夏菜子, 村田ゆり, 高橋愛海, 若年女性の検診受診を促進する広報動画一大磯町で  
の移動検診車を用いた子宮頸がん検診の受診率向上を目指して, 慶應SFC学会第24回学  
術交流大会, 慶應義塾大学: 神奈川県藤沢市, 2024年11月23日 (奨励賞受賞)
- ・ 近藤奏, 田中春名, 堀越美那, 地域で移動検診車の利用を促すポスター作り～ 大磯町  
に住む全ての女性に子宮頸がん検診を受診する機会を作り、受診率を向上させるには  
～, 慶應SFC学会第24回学術交流大会, 慶應義塾大学: 神奈川県藤沢市, 2024年11月23  
日
- ・ 高橋愛海, 杉本なおみ, 社会的孤立・孤独状態を支援する地域医療職向け卒後教育: 道  
徳的苦悩に関する文献検討を踏まえた提案, 第35回日本医学看護学教育学会学術大会,  
岡山国際交流センター: 岡山県岡山市, 2025年3月8日
- ・ 細田満和子, How to rebuild an ethical and peaceful global society from the culture of  
fear, war and pandemics, People's health can be achieved when the global  
community is at peace - need for international cooperation and a concept of  
Planetary Health, Workshop in Tokyo, Aios Nagatacho, 2024年9月1日
- ・ 細田満和子, Global Resilience: Thriving Amidst Planetary Challenges for a  
Sustainable Future, Community Health and Local Resources :The Case Study in  
Japan for Protecting the Health of the Planet and Human, Asia Pacific Sociological  
Association(APSA) Conference 2024, Hasanuddin University, Indonesia, 2024年10  
月26日
- ・ Haru Terashima, Shun Takagi, Naoki Tamura, Kazuyuki Shoji, Tahera Hossain,  
Shin Katayama, Kenta Urano, Takuro Yonezawa and Nobuo Kawaguchi, Time-  
series Stay Frequency for Multi-City Next Location Prediction using Multiple  
BERTs, ACM SIGSPATIAL Human Mobility Prediction Challenge workshop 2024,  
Atlanta, GA, USA, 2024年10月29日 (1st Prize Winner Award)
- ・ 細田満和子, Collaboration in healthcare and community settings, Effectiveness and  
challenges of peer support as a supportive relationship between patients in Japan,  
The 53rd ARNOVA (The Association for Research on Nonprofit Organizations and

Voluntary Action), Westin Hotel, Washington DC, 2024年11月23日

- ・細田満和子, Planetary Health 'The health of the planet is our health' An interdisciplinary collaboration between the natural sciences, humanities and social sciences, The 6th International Conference on Resources and Environmental Research (ICRER 2024), Hongkong, 2024年12月6日
- (3) ポスター発表 (国内会議 2 件、国際会議 1 件)
- ・市川直人, 片山晋, 河口信夫, 高橋愛海, 杉本なおみ, 中澤仁, 米澤拓郎, 社会的孤立・孤独の解消・予防を目的とするヘルスマーケティング手法の開発: 生成AIを用いた体組成データに基づく地域活動マッチングシステム, ヘルスコミュニケーションウィーク 2024, 慶應義塾大学日吉キャンパス, 2024年9月29日 (最優秀ポスター発表賞)
- ・寺島青, 高橋愛海, 庄子和之, 河口信夫, 杉本なおみ, 米澤拓郎, 社会的孤立・孤独の予防・低減を目的とする時空間移動情報活用型保健医療福祉連携基盤技術の開発, 日本保健医療福祉連携教育学会第17回学術集会, 埼玉県立大学 埼玉県越谷, 2024年11月10日

## 6-5. 新聞/TV報道・投稿、受賞等

- (1) 新聞報道・投稿 ( 8 件)
- ・報道メディア: m3医療維新, 年月日: 2024年5月5日, 内容: アメリカにおける同胞 (エスニック・マイノリティ同士) による助け合い  
<https://www.m3.com/news/open/iryoishin/1206444>
- ・報道メディア: m3医療維新, 年月日: 2024年6月2日, 内容: 家族介護に給与が支払われる仕組みとは? <https://www.m3.com/news/open/iryoishin/1211356>
- ・報道メディア: m3医療維新, 年月日: 2024年7月7日, 内容: 『ローカルサミット in 武蔵の国・ちちぶ』に参加して <https://www.m3.com/news/open/iryoishin/1216633>
- ・報道メディア: m3医療維新, 年月日: 2024年8月4日, 内容: 広がるピアサポートの輪、日本脳損傷者ケアリング・コミュニティ学会  
<https://www.m3.com/news/open/iryoishin/1224759>
- ・報道メディア: m3医療維新, 年月日: 2024年9月8日, 内容: プラネット・ボストンを訪問、舞台は「ケアファーム」・ASDの人々の「ユニークで並外れた才能」を再発見する場とは? <https://www.m3.com/news/open/iryoishin/1231035>
- ・報道メディア: m3医療維新, 年月日: 2024年10月6日, 内容: 地域における集まる場所づくりで「孤独死・孤立死」を防ぐー「キッチンたんぼぼ」「ほっちのロッヂ」の取り組みに学ぶ <https://www.m3.com/news/open/iryoishin/1235585>

- ・報道メディア：m3医療維新，年月日：2024年11月3日，内容：インドネシア、ラマンラマン在住のローカルヒーローの挑戦一人と自然のための場所づくり

<https://www.m3.com/news/open/iryoishin/1241232>

- ・報道メディア：m3医療維新，年月日：2024年12月8日，内容：超高齢社会をコラボレーションで乗り切る一患者や地域のチカラを知り活用する「知援力」と「活援力」

<https://www.m3.com/news/open/iryoishin/1246292>

## (2) 受賞 ( 4 件)

- ・受賞内容：優秀論文賞（口頭発表（国内会議）「DiverCityMeter: 大規模移動データによる生活パターン分析を通じた都市空間の多様性算出手法」における受賞），発表者/関連者：庄子 和之，寺島 青，田村 直樹，片山 晋，浦野 健太，米澤 拓郎，河口 信夫，年月日：2024年9月26日，学会/イベント名：情報処理学会第112回モバイルコンピューティングと新社会システム研究会

- ・受賞内容：最優秀ポスター発表賞（ポスター発表（国内会議）「社会的孤立・孤独の解消・予防を目的とするヘルスマーケティング手法の開発：生成AIを用いた体組成データに基づく地域活動マッチングシステム」における受賞），発表者/関連者：市川直人，片山晋，河口信夫，高橋愛海，杉本なおみ，中澤仁，米澤拓郎，年月日：2024年9月29日，学会/イベント名：ヘルスコミュニケーションウィーク2024，

- ・受賞内容：1st Prize Winner Award（口頭発表（国際会議）「Time-series Stay Frequency for Multi-City Next Location Prediction using Multiple BERTs」における受賞），発表者/関連者：Haru Terashima, Shun Takagi, Naoki Tamura, Kazuyuki Shoji, Tahera Hossain, Shin Katayama, Kenta Urano, Takuro Yonezawa and Nobuo Kawaguchi, 年月日：2024年10月29日，学会/イベント名：ACM SIGSPATIAL Human Mobility Prediction Challenge workshop 2024

- ・受賞内容：奨励賞受賞（口頭発表（国内会議）「若年女性の検診受診を促進する広報動画一大磯町での移動検診車を用いた子宮頸がん検診の受診率向上を目指して」における受賞），発表者/関連者：龍見夏菜子，村田ゆり，高橋愛海，年月日：2024年11月23日，学会/イベント名：慶應SFC学会第24回学術交流大会

## (3) その他 ( 4 件)

- ・死の自己決定と安楽死—パターンリズムと自己決定権を超えて，新社研（細田満和子），年月日：2024年7月14日，場所：オンライン

- ・WEB Article: UTA Members, Nagoya University and Keio University (Japan) tackle the problem of social isolation and loneliness by leveraging urban mobility and information technologies, 2024年9月9日，URL：

<https://www.urbantechnologyalliance.org/2024/09/09/uta-members-nagoya-university-and-keio-university-japan-tackles-the-problem-of-social-isolation-and->

[loneliness-by-leveraging-urban-mobility-and-information-technologies/](#)

- ・在宅医療のエビデンスづくり、在宅医療ことはじめ, (細田満和子), 年月日: 2024年9月28日, 場所: 千葉県ペリエホール

**6-6. 知財出願**

- (1) 国内出願 ( 1 件)
- (2) 海外出願 ( 0 件)